

2022. 12. 18 (日) ヨハネ1:9~13

1:9 すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた。

1:10 この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。

1:11 この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。

1:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。

1:13 この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。

<説教>

〈すべての人を照らすそのまことの光〉(1:9)とはイエス・キリストのことです。〈この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。〉(1:4-5)と初めに言われていました。そして〈神から遣わされた一人の人〉(1:6)バプテスマのヨハネが証したのもこのお方、イエスについてでした。イエスは〈義の太陽〉(マラキ 4:2)です。イエスは〈真理であり、いのち〉(14:6)であるお方です。太陽のように〈まことの光〉、つまり真理の光で私たち人間の心を照らします。バプテスマのヨハネも〈燃えて輝くともしび〉(5:35)でしたが、あくまでも〈ともしび〉であり、太陽の光ではありませんでした。天国ではイエスと神の栄光の輝きのおかげで〈太陽も月も必要としない〉(黙示録 21:23)ほどであります。そのような〈神であった〉(1:1)イエスが〈世に来ようとしていた(または「来た(口語訳)」)〉(1:9)。〈人となって〉(1:14)です。ではそんなイエスに対するこの〈世〉の態度はどうだったのでしょうか。

〈この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。〉(1:10)のです。当然、イエスは永遠の神として、人間の目には見えなくても〈もともと世におられ〉ました。〈すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった〉(1:3)と言われていたように〈世はこの方によって造られ〉ました。神のことば、力は天地創造の初めから、この世に満ちていました。それで使徒パウロも「神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。」と言っています(ローマ 1:20)。しかし〈世はこの方を知らなかった〉のです。ここに私たち人間の、生まれながらの心の限りなく深い邪悪さ、闇があります。最初に〈闇はこれに打ち勝たなかった〉(1:5)と使徒ヨハネは言いましたが、ここは「闇はこれを理解しなかった」とも訳すことができます(欄外注)。イエスがこの世に来られる前から、人間は自分自身と他の被造物を見ても、はっきりと認められるはずの神と神のことばイエスを認めようとして来ませんでした。〈かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。彼らは、自分たちは知者であると主張しながら愚かになり、朽ちない神の栄光を、朽ちる人間や、鳥、獣、這うものに似たかたちと替えてしまいました。〉(ローマ 1:21-23)。〈彼らは神の真理を偽りと取り替え、造り主の代わりに、造られた物を拝み、これに仕えました。〉(ローマ 1:25) このように、イエス

が人となって世に来られる前から人間の心とその作り出す世は暗闇でした。

そしてそのことはイエスが実際にこの世に来られてからも変わりませんでした。そして〈この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。〉(1:10)とは特にユダヤ人のことを言っています。神はユダヤ人、イスラエルの民を恵みとあわれみによって特別に選び、アブラハム、イサク、ヤコブの子孫である彼らをエジプトの奴隷から救い出してくださいました。彼らの子孫から救い主、メシヤ(つまりキリスト)が生まれると約束してくださっていました。キリスト・イエスも彼らの目には見えない形で彼らとともにおられ、彼らを守り導いておられました。そしていよいよ神の時が来て、イエスが約束のメシヤ、キリストとしてこの世に、殊にユダヤ人たちの目の前に現われました。しかし各福音書に書かれているように、彼らはイエスを神の子キリストと信じないで拒絶し、十字架につけて殺しました。いわば、主人が自分の家に帰って来たのに、家の者はお迎えもせず追い出してしまったのです。そうやって、ほとんどのユダヤ人たちがそのように恩知らずの無礼をイエスに働いたのでした。このように、ユダヤ人も異邦人も、〈すべての人〉が〈この方を受け入れなかった〉ということになりました。

しかしそんな中でもいわば「例外」とも言える者たちが神を信じ、神がお遣わしになった約束のキリスト、イエスを受け入れてます。その「例外」は神が造り出してくださいます。〈しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。〉(1:11-12) 生まれながらの本性は罪、暗闇の心である人が、「悪魔の子」と言われても仕方の無い人が、〈人の光〉であり〈すべての人を照らすそのまことの光〉であるイエスを〈受け入れ〉〈その名を信じ〉るならその人々には私たちの「誰にでも」〈神の子どもとなる特権〉を神が〈お与え〉になるのです。この〈特権〉は、私たち人間の側の何らかの「善いもの、善い点」を神が見て与えるものではありません。まったくどうしようもなく、イエスを知らない者、イエスを受け入れなかった者、その名を信じない者をイエスが見捨てず、あわれんでくださって、ただ恵みとして与えてくださるのです。家の者から入れてもらえず閉め出されている主人が、怒って「それならもうおさらばだ」と言って去ってしまうのではなく、そこにとどまって、主人の方がへりくだって戸をたたき続けるようなものです。「見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」(黙示録 3:20)ともイエスは言われます。〈すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方であって私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。神は、みこころの良しとするところにしたがって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。〉(エペソ 1:4-5)と、父なる神と御子イエスの永遠のあわれみ、恵みについて使徒パウロは言います。

暗闇の中にいた私たち、暗闇であった私たちが〈まことの光〉、〈世の光〉イエスを受け入れ、信じ、新しく生まれて〈神の子どもとなる特権〉を受けたのは、〈ただ神によって〉です。そのことをこのアドヴェント～クリスマスとき、改めて確認、確信し、感謝しましょう。喜んで〈ただ、神〉だけに、イエス・キリストだけに信頼して、その〈ことば〉をますます聞いて、従い、証ししていきましょう。

